

来年度（R4）学力向上策 素案

学校のミッション）児童を感動させ、児童の期待に応える

「五常小の児童に身につけさせたい力とは？」

①教職員の創意工夫と実践による生きる力の育成（非認知能力）

（職務自律性＝自己決定・自己管理）

②学力の向上（認知能力）

③教職員個人の働きがいと成長の実現（職務自律性＝自己決定・自己管理）

を同時に成り立たせる改革を行う。

これら（特に①③）を行う時間を生み出す必要があります。

→働き方改革とカリキュラムマネジメントが必要であり、これをしっかりを行います。

①教職員の創意工夫と実践による生きる力の育成

は「時間」を生み出す改革によって実現に近づくものです。

②学力向上は、児童・保護者の期待であり、

【現状確認】と【具体論】が必要です。

以下【現状確認】について述べます。

学テに見る現状認識↓

本校児童 27～36%が既につまずいていると言います。このままだとおそらく卒業生の50%以上が、中学校でなんらかのつまずきを経験するはずです。来年度からの学力向上策では、これを極力少なくしていきたいと、校長として強く思っています。

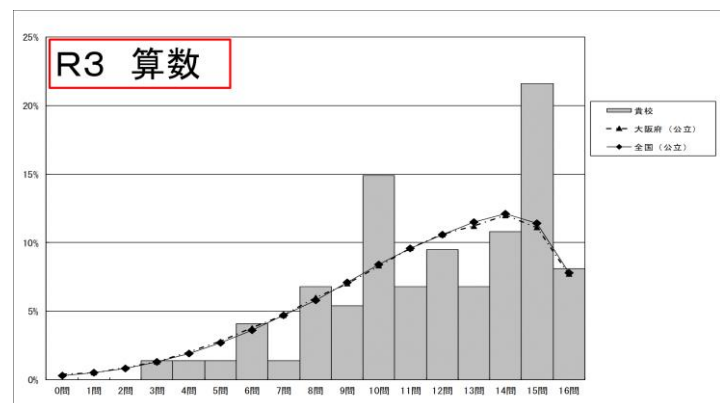
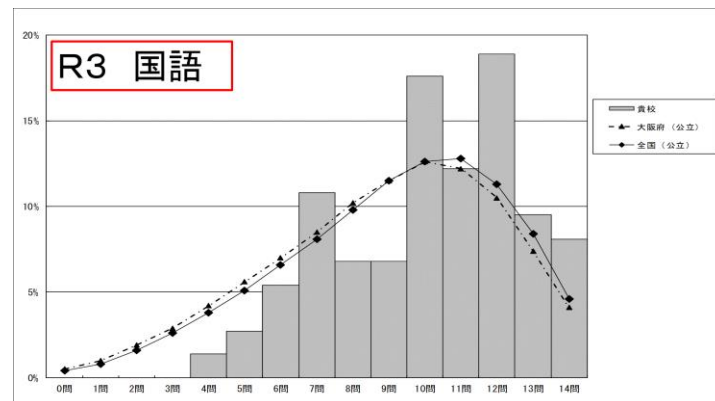
ではどうしてつまずく、と言えるのでしょうか？

◎五常小の学力の理想の姿

（国語の論理的思考力 の例）

●著者や他人の意見をよく理解した上で、話し合いが深まるよう適切に質問し、他人と比較しながら自分の考えを固めたり新たな考えに至ることができる。

●根拠を示しながら、自分の意見を論理立て、適切な言葉でわかりやすく（書き）伝えることができる。



○理想とのギャップ（なかにはできる児童はいるけれども、、、）
 ※国語その他の授業を例に授業等で見受けられること。

適切に質問できないので、話し合いが深まらないことがある。（一方通行）
 他人の意見や教科書の意味をとれていないことがある。
つまり、そもそもの「読解力」に難がある児童がいるのです。

○教育のための科学研究所の調査では、**中学の教科書を生徒の半数が読んでいません。**
読解力の不足は、他の教科の理解にも、大きく影響します。

（教育のための科学研究所 RST 調査↓）

○府立高校入試（国語）は、論説文（2つ）古文・漢文つまり**文語的な文章の読解**が主です。さらに理科、社会でも長文問題があります。つまり、中学校での授業、テストをはじめ高校入試（その先にある仕事に）に至るまで、読解ありきです。

○さらに、中学校の数学においては、理屈がわかっても**基礎基本の四則計算が素早く正確**にできないければ、到達目標得点に至りません。それは整数分野の計算問題をはじめ、図形、1次2次関数まですべてと言ってよいのです。

（※実力テスト、入試でも同様です。）

○公立高校入試では、内申点が一定重視されます。それは1年～3年の積み重ねです。児童の未来を最大限開くには、中学校の最初からつまづきを生じないように、**小学校で準備させることが重要です。**

◎本校の現状）

本校では、中学校の学習の基礎となる読解力について授業でしっかり履修させ、漢字・計算など国・算の基礎基本の習得に力を入れてきました。他方、学テ等を見ると、一定割合の児童において、基礎基本の定着に課題が見られます。

※府立入試の漢字の読み・書き取りはどこから出題されるかご存じでしょうか？

問題文を読めていない生徒が半数以上

リーディングスキルテストは選択式の問題のみで構成されています。そのため、乱択（サイコロを振って答えを選ぶ）でも正解する可能性があります。ただし、「乱択より正解が多い、とはいえない受検者の割合」を計算することにより、その問題分野で「ほとんど解けない可能性がある生徒」の割合を推定できます。2018年に実施した調査では、係り受け解析の問題において「ほとんど解けない可能性がある生徒」の割合は中学3年生で15.6%、推論の問題も65.1%、具体例同定(理数)では70.7%に上りました。すなわち、中学生の半数以上は、なんらかの意味で問題文が読めていないことになります。

読解のプロセスに基づく問題分野別
 ランダム解答よりも正答率が高いとはいえない生徒の割合

2018年3月実施調査結果より

問題分野	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年
係り受け解析	26.4%	20.4%	15.6%	10.4%	11.8%
照応解決	32.4%	23.3%	18.9%	9.8%	11.7%
同義文判定	67.5%	58.4%	43.7%	42.8%	55.2%
推論	80.3%	77.3%	65.1%	53.2%	51.1%
イメージ同定	45.5%	36.8%	23.8%	21.0%	25.3%
具体例同定(辞書)	57.5%	48.4%	41.1%	43.6%	54.2%
具体例同定(理数)	86.0%	75.7%	70.7%	53.8%	69.5%



◎来年度学力向上の課題設定)

●国語・算数基礎基本の習得を一層効果的に進める必要がある。

●学校の習得内容（の法則性）を、初見のテスト等の形式で反復して定着させる必要がある。

（英語は別に検討する）

●英語 中学1年では、小学校と合わせ、1年に1300語を習得する必要がある。※（覚えて書けるようにする）ただ、小学校では、書いたり読むための、単語習得をしていない。

（700語）

※このギャップを埋める、英語の分野の課題設定は検討中である。

○方針のキーワード

基礎基本の徹底（漢字・熟語の語彙習得、書き、読み、四則基礎計算の習得）

集中力の育成（集中と弛緩のメリハリ）

学習の効率化（個々に応じたものが学習指導要領と市教委の要請）

中学への学力保障

○追求する学力

児童・保護者のニーズに応える学力

中学のニーズに応える学力（真の小中連携）

受験（中高）にも、したたかに対応する学力

五常の児童が有利になる学力（未来を開く学力）

進学塾の考える学力をより伸ばす基礎演習

【施策】（詳細詰めはこれから。陰山英男氏の全面支援のもと挑戦する）

○施策範囲（国語 算数 英語）

国語

陰山メソッド【課題】基礎基本の読み書きに苦勞する児童を解消。

読解力を向上させる。（全ての教科のセンターピン）

漢字（熟語 辞書引き等）音読

→成果指標 単元テスト、漢字総ざらいテスト、期末テスト、学テ

ほか、漢検当該級以上合格率90%以上なども検討する

算数

陰山メソッド【課題】基礎基本の計算に苦勞する児童を解消。

100マス反復計算演習 など

→成果指標 単元テスト 期末テスト 学テ



百ます たしざん (10) 名前

	+	4	0	7	6	3	8	5	2	9	1
4											
8											
0											
7											
2											
9											
3											
5											
6											
1											

英語 検討中

まとめ

学級全体（児童）の「生きる力や学力」を伸ばすことは、**児童の未来**（可能性）を開く。

学級全体（児童）の「生きる力や学力」を伸ばすことは、
授業と理解の進行を早め、**「生きる力の実践教育」**に取り組む余裕を生む。

学級全体（児童）の「生きる力や学力」を伸ばすことは、**保護者の期待**に応えることになる。

学級全体（児童）の「生きる力や学力」を伸ばすことは、**学校への信頼を増しクレームを減らす**。

これらは、**働き方改革**にもつながる。

児童教職員含む学校全体、保護者の家庭、地域社会が満足するのです。

※（参考資料）

「満足を生む取り組み」を行うのに必要なもの。

それは「時間」ではないでしょうか。

時間があれば、もっとできるのに・・・でも・・・

さて、ここで教員の職業意識について見てみます。

日本教職員組合 HP より→

教員とりわけ小学校は、

今の仕事に対する意欲が高いと同時に、「内発性」が極めて高い。

内から沸き起こる仕事の楽しさを感じています。

ただし、年齢を重ねるとともに低下していきます。

ストレスチェックの分析によって、働きがいには、職務自律性（業務上の自己決定と自己管理）が大きく影響することがわかっています。

児童・保護者の期待に応える学校とは具体には？

次の大きな課題1、2を両立させることです。

大きな課題 1（児童・保護者、教員の満足）

①総合的な生きる力の育成

（実感はあるが測りにくいもの。主に非認知能力）

→個々の教職員の創意工夫と実践の積み重ねによる成長の実感。

（創意工夫と実践の積み重ね・・・職務自律性＝自己決定・自己管理で満足度が高まる）

②学力向上

（測れるもの。これを上げて確かな学力を定着させる。認知能力）

→標準化した学校統一の取り組みによって、測れる学力を向上

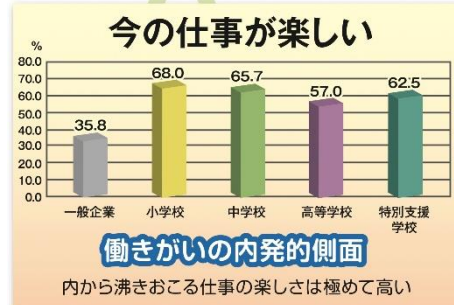
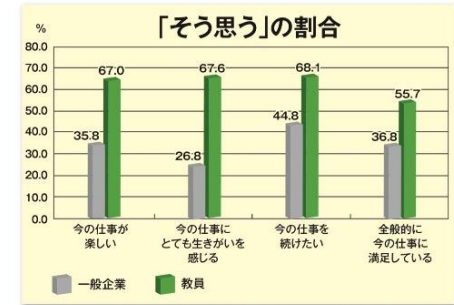
大きな課題 2（教員の満足）

③教職員個人の働きがいと成長の実感

理想の生き方の追求（参考；理想の一日の実現）

個人のキャリアと私生活の尊重・充実

●非常に高い教員の意欲



●しかし、年齢とともに低下する意欲

